

第三十一回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

平川 新 著『戦国日本と大航海時代 秀吉・家康・政宗の外交戦略』

(2018年4月25日 中央公論新社)

平川新 ひらかわ・あらた 宮城学院女子大学学長・東北大学名誉教授

1950年(昭和25年)10月22日生まれ。68歳。福岡県うきは市出身。

専門は日本近世史。

1976年(昭和51)法政大学文学部史学科卒業。1978年(昭和53)東北大学大学院文学研究科修士課程入学。1981年(同56)同博士課程中退。同年東北大学文学部助手。1983年(昭和58)宮城学院女子大学学芸学部専任講師。翌年同助教授。1985年(昭和60)東北大学教養部助教授。1996年(平成8)同東北アジア研究センター教授。2005年(平成17)同センター長。2012年(平成24)東北大学災害科学国際研究所初代所長。2014年(平成26)宮城学院女子大学学長(現在に至る)。2017年(平成29)福岡県うきは市ふるさと大使。

主著に、『伝説のなかの神 一天皇と異端の近世史』(吉川弘文館、1993年)、『紛争と世論 一近世民衆の政治参加』(東京大学出版会、1996年)、『近世日本の交通と地域経済』(清文堂出版、1997年)、『開国への道』(全集日本の歴史第一二巻、小学館、2008年)。主な編著に、『地域社会とリーダーたち』(吉川弘文館、2006年)、『東日本大震災を分析する』全二巻(明石書店、2013年)、『週刊日本の歴史』三六「幕末日本と世界」(朝日新聞出版、2014年)、『講座東北の歴史』第二巻、清文堂出版、2014年)、『江戸時代の政治と地域社会』全二巻、清文堂出版、2015年)、『通説を見直す 一六～一九世紀の日本』(清文堂出版、2015年)

受賞のことは

和辻哲郎先生の『鎖国』(昭和二五年)は、副題に「日本の悲劇」とあるように、キリスト教と西洋文明を排除した徳川幕府の鎖国政策を批判したものでした。この和辻鎖国論によって、ひ弱で排他的な江戸時代像が日本国民に定着したのではないかと思います。

拙著では、秀吉による朝鮮出兵はスペイン・ポルトガルの世界征服事業への対抗戦略であったこと、秀吉と家康による戦国争乱の克服は世界屈指の軍事大国の創出であったこと、だからこそ西洋列強から秀吉や将軍が「皇帝」と畏敬され、日本が「帝国」と尊称されたことなどを明らかにしました。その延長上にあるのが徳川政権による鎖国政策でした。世界史にも類のない、二六〇年続いた「徳川の平和」は、日本の強大さが可能にした外交政策だったのです。和辻鎖国論とは大きく異なる日本論を提起した拙著が、このたび受賞の栄誉をいただいたことをとてもうれしく思います。

《選考委員評》

山折 哲雄

戦後の長いあいだ、あの太閤秀吉による朝鮮出兵は、戦略なき無謀な侵略という烙印を押されてきた。本書は、そのこれまでの常識を根本的に覆す実証的な問題提起とについていい。

十六～七世紀といえば、大航海時代。このころ世界の最強国といわれたポルトガルとスペインが、地球規模の領土分割をめざして押し寄せ、日本列島をのみこもうとしていた。キリスト教宣教師を送りこみ、貿易の利をエサに植民地化しようとしていた。

信長はその野望を知りつつかれらの活動を許したが、秀吉と家康はやがてキリスト教を封ずる「禁教令」から「鎖国」へと政策を転換していく。なぜかといえば、かれらのねらいがアジア大陸および南太平洋の分割支配をはじめ、日本列島を植民地化することにあつたからだ。秀吉による朝鮮出兵はその意図を叩くための第一着手、やがては中国に攻め込み明帝国と戦う意気ごみだった。あわせてフィリピン諸島の攻略までも視野に入れていたのだ。その野望は結局失敗に終るけれども、当初の企てはこの国を防御するための対抗措置、つまり防衛戦略の一環だったのだという。

他方国内では強力な武士団が各地に形成されていた。家康政権の段階になると、まさに軍事的独裁の体勢を整えるまでになっていた。たとえば当時のキリシタン関係の資料や外交文書には、秀吉や家康を皇帝（エンペラドール）と呼び、日本は帝国（インプリオ）であるとする事例がでてくるからだ。

当時、ポルトガルとスペインは強烈なライバル関係にあり、相互に中傷誹謗する情報が入り乱れていたが、その間隙をぬって東北の雄、伊達政宗が独自の使節をヨーロッパに送って新たに貿易通商への道をひらこうとしていた。だが、家康政権の前にその計画も失敗する。それは同時に国内における政治秩序が整備され、「徳川の平和」が形成されていくプロセスでもあつた。

とにかく大航海時代の世界規模の「国盗り」戦争がしだいに浮かび上っていくのが鮮やかだ。本書の著者は、現在手に入るかぎりの資料・研究に目を通し、わかりやすい文章で、その全体像の本質を的確かつ説得的に描きだしている。

阿刀田 高

「そうだったのか」と読了した

暦年を言えば一五〇〇年の後半から一六〇〇年の前半にかけて、日本国はヨーロッパの列強との関係を持ち始め、まさにその揺籃期であつた。各所で折衝が起り、やがて鎖国という大鉈が振りおろされていく。情報の交換は、あるときは想像以上にくわしく、正しかったが、あるときは疎らで不確

かであった。日本から見た外国もそうであったし、外国から見た日本もそうであったろう。

平川新氏の『戦国日本と大航海時代』は、この時代にメスを入れ、他のアジアの国々が列強の支配を受け、植民地化されていったのに対し、日本はなぜそれを免れたか、偶然とは言えない事情を探って、つきつきしい。

ポイントは（秀吉や家康など）日本のリーダーたちが「皇帝」と見られていたことである。強力な「帝国」を統べる有力な統治者と考えられていたふしがあったという点である。私見を述べれば、
——当時の列強が本気で攻め込んで来たら日本は支配されただろうな——

と考えるが、中心的な統治者ばかりではなく戦国大名が各地で武力を整えている姿は、見ようによっては強力な軍事大国であり、秀吉などが朝鮮出兵に失敗したとはいえ気宇壮大で、他のリーダーたちもそれぞれ侮りがたい力を秘めていて、列強をして、

——この国は簡単じゃないぞ——

と思わせるところが充分にあった……と本書はこのあたりをさまざまな資料を駆使して入念に説き、説得力がある。加えて、これがとても読みやすい。

語られて当然の歴史でありながら従来あまり耳にすることがなかった。伊達政宗の雄大な意図にまで筆が伸びて、日本史と世界史の微妙な接点が追究され、眼から鱗の落ちる思いで読み終えた。和辻哲郎文化賞にふさわしい労作をえたことを喜びたい。